

ESSAY  
エッセイ

クラシックは面白い — その9

## ピアノのお話Ⅱ

時は18世紀、絢爛としたヨーロッパ宮廷文化が花盛り。そのひとつが音楽ですが、王侯貴族たちは自分の宮廷や城館の中に音楽用の設備を持っていました。大きいものでは、たとえばハイドンの仕えたハンガリーの大貴族エステルハーゼ公などは立派な劇場を持っていて、この劇場は居城“エステルハーゼ”の中にありました。公はイタリア人を初めとする歌手たちを備っていて、週に2回オペラの公演が行われました。もちろんヴェルサイユでもウィーンでもベルリンでも、それぞれに立派な劇場があり宮廷歌手たちが活躍していました。この時代、世俗の音楽の中心はこうした“宮廷劇場”にありました。

その中で一番給料の高い音楽家はだれだったのでしょうか。それは宮廷楽長だろう、と思われませんか。いいえ、ちがいました。この時代のドイツでの楽長様はせいぜい3,000から4,000グルデンという年俵が相場です（ハイドン楽長は1,400グルデン、ウィーン時代のモーツァルトは宮廷作曲家にはなれましたが楽長にはなれなくて、わずか800グルデン）。これに対してプリマ・ドンナと呼ばれるようなエース格のソプラノたちは人気も給料も楽長氏を抜いていました。だが、そのソプラノを上回る高給を取る歌手がいました。カストラートと呼ばれる去勢された男のソプラノ（アルト）で、人気のあるカストラートは女性のソプラノをしのぐ勢でした。9歳の少年モーツァルトがロンドンで会って感歎し、歌のレッスンをしてもらったカストラートのマンゾーリという人は年俵が（ドイツの通貨に換算して）16,000グルデンだったといえますから、モーツァルトの父レオポルトの年俵500グルデンの32年分に当たります。つまり、音楽の世界での花形は歌い手であり、その中でもソプラノやカストラートたちが名声も金も権勢もほしきままにしていました。

いま、器楽の全盛時代を見ている人たちにはちょっと想像がつかないかもしれませんが、音楽の中心は18世紀までは声楽だったのです。声楽、それも劇場（オペラ）の歌手たちが花形でした。その花形歌手たちを劇場が休みのときに引っぱり出して、歌わせようというのが“音楽会”の始まりだったのです。

この18世紀における“音楽会”の主役の座を声楽家から奪って、自分が主役になる音楽会をウィーンで始めたのがほかならぬモーツァルトでした。前回で触れたように、ヨーロッパの先進の都会では一般に公開される“音楽会”というものがありましたが、ウィーンはまだ貴族社会で市民層の発達が遅れていました。その都でモーツァルトは音楽会をやろうと思いつきました——しかも声楽家に代ってピアニスト・モーツァルトが主役になる音楽会をやろうというのです。（つづく）

執筆／石井宏（音楽評論家）

1930年、東京生まれ。音楽評論家・作家・翻訳家。モーツァルト評論の第一人者と目され、評論活動のほか、ラジオやテレビの番組でも評判となる。2004年、『反音楽史 さらば、ベートーヴェン』（新潮社）で山本七平賞を受賞。

薔薇色の街がピアノに染まる。世界でもっとも美しい音楽祭。

## ジャコバン国際ピアノ音楽祭 2017 in 岐阜

2017. 6/17(土) サラマンカホール

**マチネの部** 開場 13:30 開演 14:00 ※12:30より入場整理券（お一人様1枚）を配布

〈全席自由〉一般 1,500円、学生 500円、アペチケセット（ドリンク&フード付）2,400円

14:00～15:00 中桐望 「ショパンを弾く！」

15:30～16:30 ジャン＝バティスト・フオンルー 「リストを弾く！」

17:00～18:00 ダナ・ツィオカーリ 「シューマンを弾く！」

**ソワレの部** 開場 18:20 開演 19:00

〈全席指定〉S席 3,500円、A席 3,000円、学生半額（30歳まで）

19:00～20:30 仲道郁代 「ベートーヴェンを弾く！」

チケット  
発売中

15周年記念 日本一  
岐阜県大野町産  
バラ苗鉢  
プレゼント!  
〈マチネの部〉鑑賞  
先着  
100  
名様



中桐望



ジャン＝バティスト・フオンルー



ダナ・ツィオカーリ



仲道郁代